長崎県小値賀島:前方湾海底遺跡分布調査−2005（平成17）年度調査概要報告−

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2983

金沢大学考古学研究室　　2006 年 4 月 15 日

金大考古　第52号

長崎県小値賀島：前方湾海底遺跡分布調査
– 2005（平成 17）年度調査概要報告–

小川 光彦 ・ 塚原 博

1　はじめに

長崎県北松浦郡の小値賀島は五島列島の北部に位置し、地理的・歴史的環境から遣唐使船や唐代以来の商船の寄港地の一つとして（塚原 2000)、また中世においても五島列島内における小値賀島の遺跡数の優位性からその重要性が指摘され（塚原 1994)、中国大陸やあるいは韓半島との航路上極めて重要な海域に位置する。また近世初期においても、2001 年に行われた山見沖海底遺跡での海底分布範囲確認調査で、16 世紀後半～ 17 世紀初頭のタイ産四耳壺を中心とする遺物群の確認がなされている（小値賀町教育委員会 2002)。

小値賀町教育委員会はこうした遺跡環境の中で、2004(平成 16) 年度から 3 カ年の予定で「前方湾及び小値賀島周辺海域海底調査」を計画し、第 2 年次の 2005(平成 17) 年度は 8 月 2 1 日から 8 月 2 8 日の日程で実施した。調査員は NPO 法人アジア水中考古学研究所：ARIUA（旧九州・沖縄水中考古学協会：KOSUWA）の林田憲三氏を中心とする正会員で構成され、職業潜水士 2 名が調査をサポートし、韓国ウリ文化財研究院の研究員 2 名が韓国人インストラクター 2 名と共に潜水調査に参加した。また長嶋豊氏を中心とする国立佐世保工業高等専門学校チームによる AUV/ROV(自律式遠隔操作型水中映像探査ロボット) の試験運用が行われた。

2　海底調査の概要

2004(平成 16) 年度の調査では、調査終了間際に

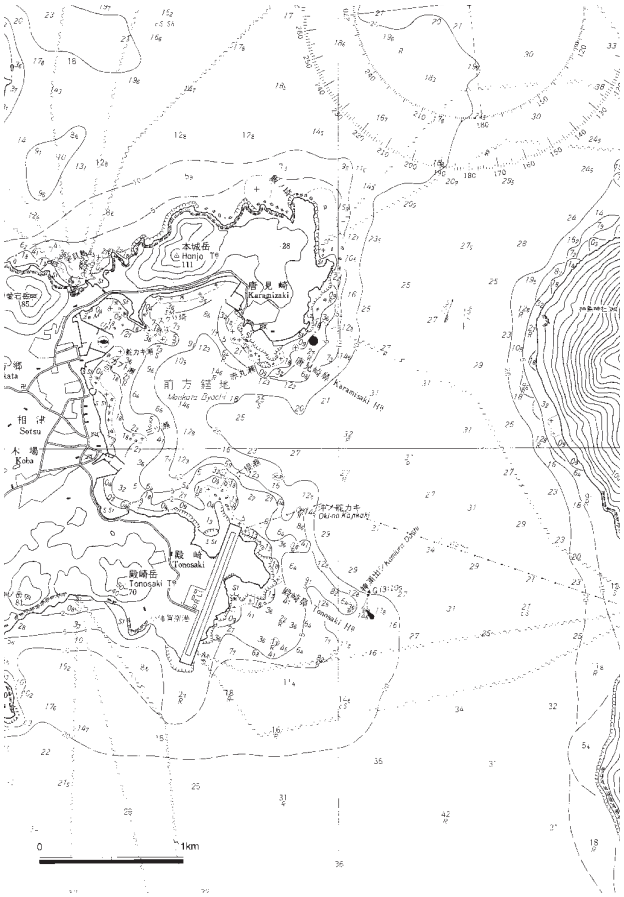

Figure.1　前方湾周辺の地形

Figure.2　クスクリ崎沖調査海域遠景
（沖の神島神社より）

なって前方湾（Figure.1）北岸に位置するクスクリ崎沖（Figure.2）における遺物散布密度の濃さが確認されたが、時間的制約によりその分布範囲および遺物の年代や構成を見るには至らなかった。これを受けて2005(平成 17) 年度の調査においては、まず第 1 にクスクリ崎沖での遺物分布状況の把握を行い、第 2 に海況の判断に従った上で、前方湾南部沿岸海域及び周辺海域で碇石目撃情報が寄せられている、沖ノ舵カキ瀬から神ノ浦出シの間の海域での碇石確認調査を行ない、第 3 に 1972・1973（昭和 47・48）年に相次いで碇石が引揚げられた、小値賀島北方に位置する納島北部のハダカ瀬周辺海底での関連遺物探索を行なうという方針で進めた。

2- 1　調査方法

当該調査における調査方法については、調査期間が短いため陸上からの測量を必要とするグリッド設定法は用いずに、すでに遺物の散布が確認されている前方湾クスクリ崎沖においては、海底に原点を設け任意の磁方位ごとに設定した基準ロープから遺物までの最短距離を測定する簡便な方法 (磁方位基準線法) で行い、湾内のその他の未調査海域ではあらかじめ海図情報より得た深度と海底地形に基づき、遺物散布の可能性のある海底にロープを設定し潜水目視確認を行う方法で調査を行った。遺物検出地点の水深はダイブコンピュータおよびダイバーズウォッチにより計測した数値であり、潮位変化の換算は行っていない。潜水調査員はＡ・Ｂの２班に分かれて担当海域の目視調査を行い、遺物が確認された場合は浮上後に回収の有無を協議し、回収の必要性があると判断された場合は、デジタルカメラにて検出状況の撮影を行い、基準ロープからの距離を計測した上で回収を行った。尚、今次調査の対象海域のほとんどは 10 m前後以浅の水深であり、適正な空気残量と潜水時間内での無減圧潜水を基本に行った。

2- 2　クスクリ崎沖の遺物分布調査

2004(平成 16) 年度に確認した折損碇石の端部を原点 (0,0) として（Figure.3）、遺物分布の比較的濃い北側と東側を中心に、磁方位 15・40・60・90・115・240・315・345 度の 8 方位角に基準ロープを設定し、潜水目視確認を行った。調査周辺海域は陸上のクスクリ崎から連なる岩礁が南西～西北西方向に延びており、このラインにそって幅約 50 mの範囲で、人頭大～数十ｃｍの巨礫が観察される。この礫岩分布範囲の外側は砂泥層が広がり、遺物の多くは礫岩分布範囲において検出された。遺物検出地点の水深は 8.6 ～ 11.4 mであり、全体的な海底傾斜は南東方向に下るが、クスクリ崎の延長ラインを挟んで北東・南西それぞれの方向にも傾斜している。今次調査の海底面目視調査により新たに確認された遺物は、中国陶磁器（Figures.4・5）を中心に 3 点の碇石を含む 34 点であるが、原点に

Figure.3　2004 年度確認碇石：原点（0,0）

Figure.4　中国陶磁器検出状況

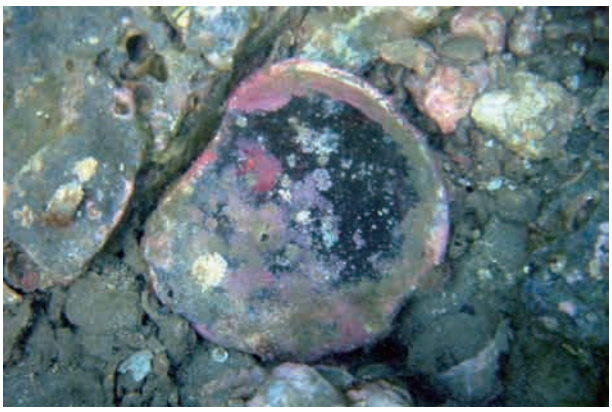

Figure.5　土師器杯検出状況

使用した碇石も含めて碇石の分布地点はクスクリ崎の延長ライン南西側および北東側の礫岩分布範囲の縁辺付近である。陶磁器類の分布は碇石の分布の中にあり、これらの遺物分布状況は遺物の遺棄時の状況と遺跡の形成過程に起因しているものと考えられる。

2-3　碇石目撃地点の確認調査

前方湾南側に突出する「殿崎鼻」から「神浦出シ」にかけての海域では、地元の海士より定形型と見られる碇石の目撃情報が寄せられており、潜水目視調査を行った。同海域は前方湾の湾外にあたり、小値賀島の東に位置する野崎島との間で海峡を形成している。そのため常時潮流があり、潮の干満に伴い潮流はさらに激しさを増す地点である。海況と潮流を見計らい、磁方位 15 度で 100 mと 200 mの基準ロープを設定し、２班で２度のドリフトダイビングによる潜水を行ったが碇石は確認できなかった。

2-4　前方湾南岸の確認調査

未踏査海域である前方湾南岸において、海底の傾斜が陸方向に向かって急勾配となる駆け上がり斜面を中心に潜水目視調査を行った。３地点で 200 m基準ロープの設定による潜水と１海域でのドリフトダイビングによる潜水を行ったが遺物の散布は皆無に等しく、細部加工の見られない角柱状碇石（Figure.6）２点が、それぞれ単体で確認されたのみである。

2-5　AUV/ROV(自律式遠隔操作型水中映像探査ロボット) の試験運用

既製の製品化された ROV(Remotely Operated Vehicle) は水中施設のリアルタイムでの確認検査などで利用されているが、太い動力ケーブルで支援船に繋がれているため、潮流の影響を受けやすく、また支援船から遠く離れた位置からのオペレーションが出来ないという問題点がある。今回試験運用された AUV(Autonomous Underwater Vehicle)/ROV は支援船～アンテナブイ間を無線電波で、アンテナブイ～ロボット本体間を光ファイバー通信ケーブルで繋いだシステムであり、既製 ROV の問題点を克服する目的で製作された試作品である。潮流の穏やかな前方湾内のクスクリ崎沖にて試験運用の実施を行ったが、機動性とケーブルの接続等に問題点が見られたが、システムそのものの利点と次年度の本格運用に向けての改良すべき点を確認することができた。

3　検出遺物と調査の成果

前方湾南岸海域では定形型ではない角柱状碇石２点の確認のみに留まったものの、2004(平成 16) 年度の調査最終段階において、中国の外洋船に伴うものと思われる定形型碇石の欠損品 (今次調査の原点に使用) ２点と、これに近接して完形に近い白磁玉縁口縁碗と龍泉窯系青磁劃花文碗が確認された前方湾北側のクスクリ崎沖で遺物の詳細分布調査を行ったところ、34 点の遺物が確認された。その内、碇石２点は回収を行わなかったが、青磁９点、白磁５点、褐釉陶器９点、国産中世土器４点、角柱状碇石１点、近世～近代陶磁器４点の計 32 点の遺物を回収した。近世～近代の国産陶磁器を除いた 27 点の中国陶磁器と国産中世土器は 12 世紀～ 13 世紀に年代比定されるものであり、特に青磁９点の内の７点は「大宰府陶磁器分類」（山本 2000）による I 類の龍泉窯系青磁劃画文碗（Figure.7）で、残る２点は同安窯系青磁碗・皿（Figure.8）であり、

Figure.6　角柱状碇石

Figure.7　龍泉窯系青磁劃画文碗

Figure.8　同安窯系青磁皿

Figure.9　宜興窯系褐釉陶器四耳壺

Figure.10　白磁口禿口縁碗

Figure.11　土師器杯底部

ともに 12 世紀後半～末頃 (D期) に位置づけられるものである。このほかに 13 世紀前後と思われる宜興窯系褐釉陶器四耳壺が（Figure.9）２点と 13 世紀中頃～ 14 世紀初頭前後 (F 期) に位置づけられる白磁口禿口縁碗（Figure.10）１点を回収している。陶器壺に関しては年代幅を比較的長く取る必要があるものと思われるが、回収された遺物を現在の中国陶磁器の編年観で見る限り、12 世紀後半～末頃 (D期) を中心とする遺物群に加えて、これに前後する時期の中国陶磁器が若干含まれていることになる。

今次調査で新たに確認された碇石は、クスクリ崎沖では定形型碇石と思われるものの欠損品１点と細部加工の見られない角柱状碇石２点であり、この内の角柱状碇石１点を回収している。また、南岸においても２点の角柱状碇石を視認しており、合わせて４点の角柱状碇石が確認されている。これら角柱状碇石の長さは約 120cm・100cm(２点)・50cm と異なるものであるが、100cm 以上の角柱状碇石は網の固定碇や伝馬船などの小型船に用いられたものとしては大きすぎるとも考えられる。碇石の型式・編年研究が進展しておらず、海底面での単独検出という状況であるが、クスクリ崎沖では中国陶磁器とほぼ同時期の 12 世紀後半～ 13 世紀前半代の土師器杯（Figure.11）と東播系須恵器鉢１点も回収しており、今後は中国陶磁器に対応する定形型碇石 (＝中国の外洋交易船) に対して、国産土器に対応する角柱状碇石 (＝国内の地域内交易船) と見る視点も必要であろうと思われる。

前年度は前方湾内の西岸 (神島神社の前面) でも目視確認調査を行ったが遺物の確認は無く、前方湾内ではその北岸に近いクスクリ崎沖周辺において遺物の集中分布が見られ、その年代は中世前半期のものを主体とするという状況が確認された。

４　考察と今後の課題

古事記や肥前国風土記によれば五島列島の古称は値嘉嶋であり、値嘉嶋は小値賀嶋と大値嘉嶋に大きく地域区分されていた。青方文書によればこの小値賀嶋とは現在の若松島以北の、大値嘉嶋とは奈留島以南の島

Figure.12　小値賀発見の定形型碇石

嶼群である。中世末期に大値嘉嶋の呼称は消滅したがその中心地は福江島にあり、小値賀嶋では現在の小値賀島にあった。三代実録によれば、貞観 18 年（876）朝廷は比羅嶋（平戸）と値嘉嶋を肥前国から分離独立させ新たな行政区として「値嘉嶋」を設置したが、その一因は増加する唐船来航への対応であった。管見では現時点で五島列島最古の中国陶磁器は福江島大浜遺跡及び一本木遺跡出土から出土した 9 世紀末に比定される越州窯青磁である。大浜遺跡は大値嘉嶋域における古代・中世前期遺跡としては現時点で唯一最大の遺跡であり、特に 11 ～ 12 世紀代の出土遺物は質量ともに五島列島では群を抜いた存在である。しかしその後の大値嘉嶋域にはこうした遺跡の存在は確認されておらず、遺跡も極めて希薄な状況にある。逆に 12 世紀以降の小値賀嶋域では在地勢力の活発化が伺われ、とりわけ小値賀島（現在の小値賀町管内）には五島列島における貿易陶磁器出土遺跡総数の約 70％を占める 55 遺跡が集中分布するという実情があり、今次の前方湾を中心とする海底調査の成果はこうした遺跡の偏在性に対して、その解釈に示唆を与えるものともいえよう。

小値賀島は五島列島の北部に位置し、中世の国際交易港である博多と中国の寧波方面から東シナ海を横断、あるいは福建省から琉球列島を経由する往還ルートの途上にある。前方湾の東方に近接する野崎島は、東側に開口した前方湾を塞ぐ形で自然堤防の役目を果たし、低島の多い周辺諸島の中では際立って高島であるため、周辺海域を見渡すとともに周辺海域からの目印ともなる島である。前方湾のクスクリ崎沖付近は北側に位置する本城岳 (標高 111 m) によって北西の季節風を遮ると共に湾奥部では潮流も緩やかであり、同海域は船舶の停泊地として適した用件を備えている。一方、前方湾の南岸は季節風を湾内上空から直接受ける上に暗岩・干出岩が多く、また北上する海流の一部は湾内に入り込み、干満に伴う潮流の変化も加わって潮の複雑な変化が予想されるため、大型船舶の航行・碇泊には危険を伴うものと思われる。実際、調査中に北風が強く周辺海域が時化を伴い、湾内の南側までも荒れ気味の海況になった時においても、クスクリ崎沖周辺は実に穏やかであった。前方湾内でこの付近にのみ魚の養殖生簀の設置が見られるのもこのためであろう。

小値賀島は五島列島の中でも中世の遺跡数・遺物数が多いことが知られており、博多周辺に次ぐ定形型碇石（Figure.12）の発見例の多さも、こうした小値賀島の地理的要因と前方湾の地形的要因に起因するものと考えられる。そしてこのクスクリ崎沖は中国の交易船の寄港・碇泊地であった可能性が高いものと考えられる。今次調査において回収した 23 点の中国陶磁器は、完形に近いものか比較的破片単位の大きなものが多い。遺物分布地点は陸上より 300 ～ 400 m沖であり、かつ、付近には湾西岸の相津遺跡以外に大量の貿易陶磁器を出土する遺跡も無いことからも、これらの遺物が陸上遺跡からの 2 次的な流れ込みとは考えにくく、さらに遺物の破片単位の大きさは、海面から遺棄された状態の遺物の特徴を示しており、商品の陸揚げ時に荷崩れしたものか船体そのものの沈没が想定される。碇石と船載陶磁器のセットでの確認は中国交易船の存在を窺い得ると同時に、この種の碇石の使用時期をも知り得る用件の一つである。今次の回収遺物は海底での表採資料であり、これをもって碇石との共伴関係を論じるのは早計であろうが、とは言え、クスクリ崎沖の海底に散在する遺物の年代的なまとまり方は、そうした可能性を示すものとして注目される。一部の遺物は砂泥質の底質から礫岩の集積する地点で半ば埋没する状況で確認されており、海底下の土砂の掘削を行うことにより遺物の出土する可能性は高いものであると思われる。計画最終年である 2006（平成 18）年度には、こうした海底での発掘作業も視野にいれて調査企画を検討しているところである。海底地形と湾内における最大波高の発生する方向を考慮し、荷崩れ品あるいは沈船の存在を想定した場合のその主体部は、さら

に南東の沖側に位置すると考えられるのである。しかし、その海域は魚の養殖生簀が設置されており、現在のところ本格的な海底発掘は困難であるが、海底下の状況把握は重要な課題である。

今年度は計画最終年である。前方湾内では未踏査海域の目視確認調査と、前述したクスクリ崎沖の遺物集中地区砂泥層の試掘調査を、湾外では未確認碇石の探索を予定している。クスクリ崎沖遺物群の性格をより明確に捉えるためにも、小規模な試掘調査による海底下の堆積状況の確認が必要である。また、これらの課題に加え、国立佐世保工業高等専門学校チームによる改良型 AUV/ROV が、より実用化に近づくことを期待したいところである。

引用文献

小値賀町教育委員会 2002「山見沖海底遺跡」『小値賀町文化財調査報告書』第 16 集

塚原 博 1994「五島列島の貿易陶磁器出土遺跡」『長崎県の考古学―中・近世研究特集―』長崎県考古学会

塚原 博 2000『小値賀島史の概要～考古学の研究成果から見た小値賀の歴史～』小値賀町教育委員会

山本信夫 2000「大宰府条坊跡ⅩⅤ–陶磁器分類編―」『太宰府市の文化財』第 49 集 太宰府市教育委員会

Figure.13　2005 年度調査参加者